

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

教養文化

更科功教授

私は、ある先生に変なことを教わった。それは、お金をけちらずにどんどん本を買いなさい。でも、買った本は、かならずしも読まなくてもよい、というのである。本が部屋にあるだけで、その人には教養があるような雰囲気が身につくらしい。何だか嘘くさい話だし、私自身も、この話に完全に納得しているわけではない。100パーセント納得しているわけではないけれど、でも1パーセントぐらいは納得しているかもしれない。買った本は全部読むに越したことはないけれど、たとえ読んでいなくても、本が部屋に並んでいるのを見るのはなかなかよいものだ。それらの中には、まったく読んでいない本もあるし、1回読んだ本もあるし、何十回も読んだ本もある。その中から、私が好きな本を紹介します。

『種の起原 上・下 改版（岩波文庫）』

ダーウィン 著，八杉竜一 訳，
岩波書店，1990



私は『種の起原』という本のことを、神を否定して、生物が進化すること科学的に述べた本だとずっと思っていた。なぜなら『種の起原』を紹介する記事などに、たいいていそう書いてあったからだ。その後、大学院に入ってから『種の起原』を丁寧に読んでみた。そして、『種の起原』を読み終えてページを閉じたとき、思わず「嘘だろおっ！」と叫んでしまった。だって『種の起原』には、「神（The Creator）が生物を創った」と書かれていたのである。なんと『種の起原』は神学書だったのだ。そのとき、私の目から大きな鱗が落ちた。「そうか。きっと、あの記事を書いた人は『種の起原』を読んでいないのだ。実際に『種の起原』を読まなくても、偉そうなことは書けるのだ」じつは『種の起原』は本国のイギリスでも、買っても読まれない本の代表らしい。だから、最初から最後まで読むのはたいへんだけれど、最終章（第14章）の最後の1ページを読むだけでも意味のある最高の古典である。

『すばらしい人体：あなたの体をめぐる知的冒険』

山本健人 著，ダイヤモンド社，2021



じつは、人間は、かなり大きな生物である。ゾウやクジラのようにものすごく大きい生物は目立つので、私たちは、ついそういう生物と自分を比べてしまう。そして、人間なんて小さいと思ってしまう。でも、実際には、私たちより大きい生物なんてほとんどいない。大学へ通う途中で、鳥やネコや虫などの生物に出会うことはあるけれど、みんな私たちより小さな生物だ。生物全体の99.9パーセント以上は、私たちより小さな生物なのである。本書の著者は、医学生時代の解剖実習で、「人体がいかに重いか」という事実たいへん驚いたという。たとえば、脚は片方だけでも10キログラム以上あり、持ち上げるのに苦勞する。ところが不思議なことに、日常生活では、私たちは自分の体の重さを感じない。それは、なぜだろうか。そんな疑問に答えて、私たちの体がどんなにうまくできているかを教えてくれるのが本書である。

『四畳半タイムマシンブルース』

上田誠 原案，森見登美彦 著，
KADOKAWA，2022



この本の著者は、農学部出身で、生命科学の研究で大学院の修士課程を修了している。そして私は、生命科学の教員である。だからといって、生命科学つながりで、この本を推薦するわけではない。この本は、生命科学とは何の関係もない内容の小説である。夏休みのある日、部屋のクーラーのリモコンが壊れて絶望していた大学生の前にタイムマシンが現れる。そのタイムマシンで昨日へ行ったり、タイムマシンを使わずに押し入れに隠れて今日に戻ったりする、半分ふざけた話である。しかし、登場人物は、それぞれにとっても魅力的だ。空疎な大学生活を送ってしまい、取り返しのつかない時間の浪費に後悔している3年生の男子や、映画製作の才能がないのに、めげることなく映画製作に突き進む2年生の女子など、一くせも二くせもある人ばかりである。でも、あまり深刻に悩むこともなく、それなりに楽しく生きている。人生に無駄な季節はないことを実感させられる、ケセラセラな話である。辛いときに読むとよいかもしれない。